

# 『教育におけるジェンダー問題』の諸論文をめぐって

河上婦志子

## 1 はじめに

『教育におけるジェンダー問題』という本がある。<sup>1)</sup>この本の第1部理論編には、「公教育はジェンダー・フリーであるべきか?」というサブパートがあり、3本の論文から構成されている。そのうちの1本はバーバラ・ヒューストンの「ジェンダー・フリーダムとセクシスト教育の捉えにくさ」<sup>2)</sup>である。この論文は同じタイトルで『教育理論 (*Educational Theory*)』35巻4号(1985)に掲載されており、それがリンダ・ストーン編『教育フェミニズム読本 (*The Education Feminism Reader*)』では「公教育はジェンダー・フリーであるべきか?」のタイトルに変更されて収録されている。<sup>3)</sup>

私たちがヒューストンの論文名として理解している「公教育はジェンダー・フリーであるべきか?」が何故、『教育におけるジェンダー問題』という本のサブパートタイトルになっているのだろうか?

その理由は、この本の共著者の一人アン・デイラーが序章で述べていることから明らかになる。この本が出版されるに至った経過説明によれば、1981年の教育哲学会 (*the Philosophy of Education Society*) の会長挨拶でジェイン・ローランド・マーティン (*Jane Roland Martin*) が言及した「教育におけるジェンダー・センシティブ」という考え方に触発された著者たちが、「公教育はジェンダー・フリーであるべきか?」というシンポジウムを企画しようと会合

を開き、引き続き共同研究や哲学的議論を積み重ねてその成果をこの本にまとめたのだという (pp. 1-2)。<sup>4)</sup>

つまり彼女たちは、ジェンダー・センシティブこそ教育にとって必要な姿勢だという視点に立って、「公教育はジェンダー・フリーであるべきか?」という問題を設定し、この疑問をめぐる複数の視点や方法を提示しようとしてこのパートを立てたのである。第I部の構成は次のとおりである。<sup>5)</sup>

### 第I部 理論

#### 第1章 セクシズムとセクシスト教育の概念分析

サブパート1: 公教育はジェンダー・フリーであるべきか?

#### 第2章 ジェンダー化された教育: 伝統の再考

#### 第3章 子どもを自由に: ジェンダーの廃棄

#### 第4章 ジェンダー・フリーダムとセクシスト教育の捉えにくさ

#### 第5章 両性具有の教室: 解放かそれとも圧政か?

#### 第6章 ジェンダーの理論化: 私たちはどの程度ジェンダーを必要としているか?

第2章から第6章の5本の論文はすべて、セクシズムを解消するための教育を目指す立場から、「ジェンダー・フリー」という言葉や概念に焦点を当て、そこから派生するさまざまな問題について示唆に富んだ議論を展開している。本稿は、これらの論文を紹介しつつ、「ジェンダー・フリー」の意味とセクシズムを解消するための教育方法について考察しようとするものである。

## 2 セクシズムの定義

「公教育はジェンダー・フリーであるべきか？」の 3 本の論文紹介に入る前に、それに先立つ第 1 章「セクシズムとセクシスト教育の概念分析」(アイムとヒューストンの共著)<sup>9)</sup>から、著者たちがセクシズムをどのように定義しているのかを見ておきたい。なぜなら彼女たちは「ジェンダー・フリー」を、教育におけるセクシズムと闘うための方法論として位置づけ、その是非を問題にしているからである。セクシズムをどのようなものとして定義づけるかによって、それを解消するための方法論も自ずから異なるに違いない。

彼女たちは、セクシズムを内容・結果・意図の 3 つの側面から考察し、それぞれに定義づけを行なっている。それは 3 つのどの側面でセクシズムが作用しているかによって、セクシズムの様相も意味合いも、さらには闘い方も異なると考えているからである。ここでは、その哲学的な議論の詳細な紹介は省き、3 本のサブパート論文との関連を念頭に、彼女たちの定義を再構成し、セクシズムの概念を明らかにしてみよう。

彼女たちによればセクシズムとは、人間を男女に分け、生得的・固定的な性差 (sex differences) があるという性差決定論 (natural sexual determination) に立ってステレオタイプな性別特性 (characteristics) や性役割観 (sex role) を正当化し、さらには優劣・上下の関係に位置づけ、それによって社会的・政治的権力の不平等な配分や異なる処遇を正当化する考え方であるという。そして性差が本当にあるのかないのかについては答えを留保するが、性差を理由に権力配分が正当化されることは許されないとする。問題は性差の有無ではなく、男女間の優劣関係であり、不平等な権力関係であるのだという。

彼女たちはジェンダーを、性差として、性役割として、あるいは性の関係性として立ち現れ、

かつ重層的な構造をつくっているものと見ている。つまりジェンダーを性差—性別特性—性役割—性関係—性別による権力や地位の配分、という要素に分解し、ほぼこの位相順序で男性優位・男性中心にジェンダーを統合し構築している信念体系がセクシズムであると考えているのだ。彼女たちが最終的に解消しようとしているのは、「セクシズムによって重層的に構築されたジェンダー構造」であるが、しかしこのジェンダー構造を一気に解消するのは困難なので、各位相の、セクシズムによって歪められた不平等なジェンダー概念やジェンダー関係の解消を積み重ねていくことが、セクシズムとの闘いになる。つまりステレオタイプな性差概念や伝統的性役割観との闘いを通して、セクシズムを解体することになるのだ。

ただアイムとヒューストンは、この構造の基礎をなす性差の有無については不可知であるとする。性差の有無は問題ではない。真の問題はセクシズムを解消するには、あるいは教育からセクシズムを排除するには、このジェンダー構造にどのように挑めばよいのか？ である。

教育の場でセクシズムの解消を目指すにはどのような方法が適切なのか？ それらの方法にはどのような問題が潜んでいるのか？ それをさまざまな視点から考察しているのが、「公教育はジェンダー・フリーであるべきか？」の諸論文である。まずは第 2, 3, 4 章の論文に考察を加えてみたい。それらは、次のように紹介されている。(p. 32)

次の 3 つの章では、3 つの対照的な可能性を明らかにしてみたい。それは①セクシストのジェンダーを帯びた考え方 (gender-laden scheme)、②ノンセクシストのジェンダー・フリーな考え方、③ノンセクシストのジェンダーを帯びた考え方、である。最初の章では、男女は異なるものであるがゆえに社会的秩序における男性支配と女性の従属性が正当化されるという伝統的な考え方について、詳細な説明と批判的分析が加

えられる。この伝統的立場は、公教育はジェンダー・フリーであるべきかという疑問に対して、ノーと答える。第2の章では、ジェンダー・フリーな考え方にもとづいたフェミニストの視点から、賛成の意見が提示される。そして最後の章では、これとは逆に、ジェンダーを帯びた考え方にもとづくフェミニストの視点によって、反対の意見が表明される。

ここに見られるように、第4章のヒューストンの論文はノンセクシストのジェンダーを帯びた立場から「ジェンダー・フリー」に対してノーというために書かれている。では、「ジェンダー・フリー」とは一体何を指すのか？ サブパート1の3つの論文から、その意味を探ってみよう。<sup>21</sup>

### 3 ジェンダー・フリーをめぐる議論

#### 1) セクシストの教育観

第2章「ジェンダー化された教育：伝統の再考」<sup>22</sup>を担当したメアリアン・アムの課題は、セクシストの教育観を紹介し、それに批判を加えることである。

アムによれば、セクシストは先天的性差を大前提として、男性の攻撃性や女性の母性を必然的な性別特性であるとみなし、性別特性によって男女の優劣関係や性役割を正当化している。そのためセクシストはジェンダー・フリー教育を否定し、男女それぞれの性役割にあった教育をすることが男女両方の幸福にも社会の安定や効率化にも役立つと強弁するという。

彼女はルソーやゴールドバーグの議論を引用してセクシズムの教育観を描写しつつ、伝統主義者たちの性役割観の論点を次の3つに整理し、反論を試みている。

①性役割は天然自然のものである：伝統主義者は先天的性差にもとづいて性役割が決定されると考えるので、性役割を否定するジェンダー・フリー教育に反対する。だが性役割が先天

的で変えようのないものなら、どんな教育が行なわれようと性役割が発現するはずなので、ジェンダー・フリー教育を否定することは無意味である。

②性役割は生物的再生産に必要である：伝統主義者たちは性役割の区分がなければ性交渉が不可能になると主張するが、そうではなく現在と変わらない楽しいプロセスになる可能性もある、私たちは誰もまだ完全にジェンダーから解放された世界を知らないのだから、この点について結論をだすことはできない。また伝統主義者たちは性役割を否定した社会では子育てがうまくいかないと主張するが、それは出産能力と子育て能力を混同した議論に過ぎない。

③性役割は文化の継承に必要である：伝統的性役割は社会の文化そのものなので、女性が、科学技術の知識や学歴を獲得してその分野の職業に就くよう奨励する教育は、伝統的文化を破壊することだ、と伝統主義者は批判する。しかし伝統が必ずしも絶対的価値をもつとはいえない、よき伝統もあれば悪しき伝統もある。

さらに文化の継承という論点に関して伝統主義者は性役割の3つの利点を挙げるが、それぞれに問題があるとアムは説く。

第一に、伝統的性役割は混乱や曖昧性を排除して私たちの生活や行動の規範を明確に規定してくれるので、人はその期待に沿って行動するだけでよく効率的であると伝統主義者はいうが、効率的であるということだけが唯一の価値基準でない。またジェンダー以外にも効率を保障する分業の仕組みはある。この議論は、性役割によって女性たちがダブルバインドや不自由を経験していることを無視している、とアムは反論する。

第二に、性役割は女性に最大の利益をもたらすと伝統主義者は主張する、とアムはいう。このわかりにくい主張の理解を助けるために、アムが引用している (p. 38) ゴールドバーグの文章を記しておこう。

もし社会が、男子と競争して勝つことは女性らしくない（女性として適切な行動でない）ことを女の子に教えなければ、またもし攻撃性が成功につながるような政治や経済の世界から遠ざかっているよう女の子を教育しなければ、女の子たちは大人になったときに、女性がほとんど男性に勝つことができない領域で競争することを欲し、生物的自然が女性を男性より優位にしてくれた領域において成功するための自己イメージを持つことができなくなるだろう。もし女性が若いときに女性らしさを開発しておかなければ（それは生物的に自動的に育つような資質ではないとするなら）、攻撃的男性の立場から物事に対処しなければならなくなる。今現在女性に与えられている女性らしい能力から生みだされる力をすっかり失うばかりでなく、何も得られない結果になってしまう。(pp. 203-204)<sup>9)</sup>

女子は伝統的性役割に従っている方が幸せになれるのだというこの議論に対してアームは、女子は男子に勝つことができないと前提していること、攻撃性を発揮して勝つことを「成功」とみなしていることを指摘し、特定の領域に押し込められ選択の自由を奪われているより、たとえ成功することができなくても人は自分を試す機会を提供される方がましではないかと反論している。

第三に、伝統的性役割は私的領域への公権力の介入を抑止する、と伝統主義者はいう。なぜなら性の平等を制度化し監視するのに必要な統制を行おうとすれば、政府の全体主義的な形態を招くことになるからである、と。平等を実現させようとする政策が、男性の権利や威信を侵食し、逆に女性の機会や可能性を拡大したことをいうなら、そのとおりである。だが平等化政策を排除して伝統的性役割を維持するのではなく、公的領域がこれまで女性的価値とされてきたものによって再定義されるようになれば、この世界は女性と同様男性にとっても住みやすくなるだろうと、アームは言う。

この第2章ではジェンダーは主に「伝統的」性役割観や性別特性を意味している。性差の解消でもなければ、性役割という概念自体の排除でもなく、「伝統的」性役割からの自由を主張し、教育の中で伝えていくことが、ここでいう「ジェンダー・フリー」なのだ。

ところで家族擁護法 (the Family Protection Act)<sup>10)</sup> を成立させようとする人々によって受け継がれているというものの、アームが批判の対象としている伝統主義者の議論の多くはかなり古いもので、現在の女性・男性がこの「伝統的」ジェンダー観にどれくらい呪縛されているか、あるいはこうしたジェンダー観にそって教育が行なわれているか、疑問なしとしない。ジェンダーの様相は時代とともに変化し、ルソーが言うような男性に従属し男性に奉仕して生きることが女性の幸福だというジェンダー観を標的にして、セクシズムを論じることは時代遅れの誇りを免れないのではないだろうか？

アームは「伝統的」性役割観を批判の対象にしているが、男女二分法や性差の存在それ自体については取り上げていない。だが次章のモーガンはよりラディカルに、ジェンダーの重層構造のもっとも基底的な部分であるカテゴリーの廃棄を主張する。

## 2) ジェンダー・カテゴリーの廃棄

第3章「子どもを自由に：ジェンダーの廃棄」<sup>11)</sup> を担当したキャスリン・ポーリィ・モーガンの役回りは、学校からのジェンダー・カテゴリーの排除を強力に主張することである。彼女は、ジェンダーの重層構造の基底をなすカテゴリーの問題点を指摘することによって、果敢にこの課題に挑んでいる。

モーガンは、セクシズムを解消するにはジェンダー・カテゴリーを廃棄しなければならないと主張する。(p. 42) それはなぜか？

私たちが身を置いている社会的現実世界は、人々がジェンダー・カテゴリーによって区別さ

れるだけではなく、それによって差別され、またそれを使用することによって害される世界である。私たちの世界は、たとえ政策イデオロギーのレベルではっきり見えなくても、男性が理論的にも、政治的にも、実際上も優越性を与えられている家父長制の世界である。

モーガンによれば、ジェンダー・カテゴリーから生じた区別は性別特性論につながり、性別役割論を生み、その結果女性は男性優位の社会の中での序列関係の中に組み込まれることになる。アムとヒューストンがいうように「セクシストの信念体系は、人間の男女の間には明らかな自然の差異が存在するという公理を中心とし、男性は事実上男性というカテゴリーに属し、支配権を与えられ、女性に対して権威を行使できるような社会的・政治的配置を正当化することが道徳的に妥当であるとみなす」(p. 43)からである。このセクシスト的信念体系は、私たちの生活に深く浸透しているので、ジェンダーというカテゴリーを完全に廃棄しなければ、私たちはいつでも性別役割や性別特性論にとらわれ続けることになる、とモーガンは説く。(p. 45)

ジェンダーから自由な個人的・社会的世界に移行するということは、個人のアイデンティティの感覚、私たちが持っている基本的概念枠組み、私たちのもっとも親密で私的だと思われる行動、私たちの社会的・政治的実践などが根本的に変革されることである。私たちは自己アイデンティティの感覚を脱ジェンダー化し、ジェンダーは私たちの自己理解を決定する社会変数としての機能を持たないようになるはずだ。ジェンダーが、私たちの生活を作り上げる上での、あらゆる意味での社会的・政治的カテゴリー(権力的であろうとなかろうと)ではなくなれば、性別役割は完全に消滅するに違いない。ジェンダーはもはや分類の、予測の、解釈の、評価の操作的カテゴリーではなくなる。その結果、ジェンダーを配慮して私たちの心理的態度や社

会的・道徳的姿勢を変えることは、まったく無意味で不必要になるだろう。ジェンダーが原則的な公平さを再び妨害することになるかもしれないという潜在的な危険はあるものの、ジェンダーはまるでそばかすのように本質とは無関係な何ものかとみなされるようになるだろう。

ここでは「ジェンダー・フリー」とは、ジェンダー・カテゴリーによって生まれるあらゆるジェンダー構造から自由になった状態を意味するといつてよい。さらにモーガンは、ジェンダー・カテゴリーが問題なのはそれが性別役割・性別差別・男性優位主義・家父長制と結びついてしまうためであるが、たとえ性別差別と関連を持たなくても、次のような理由からジェンダー・カテゴリーを廃棄する意義があると説く。(pp. 47-48)

①ジェンダー・カテゴリーが存在していると、そこに性別役割が付随し、あるジェンダーに帰属している人は、異なる性別役割を選択することが困難になるからである。

②ジェンダー・カテゴリーによって、人間の連続性が切断され、統合的であるはずの社会集団が二分、あるいは分断されてしまうからである。

③特定の性格や行動や好みや意欲や認知方法がジェンダーと結びつけて描かれることが多いが、それに合致しない人は規範からはずれていると罰せられることになりやすい。

つまりモーガンは、ジェンダー・カテゴリーがあるために、性別特性や性別役割が規範化され、私たちはそれに縛られることになるというのだ。

そして彼女は、ジェンダー・カテゴリーのない社会の利点を4つ挙げる。

①職業・セクシュアリティ・身体運動・発話・服装・学習・人間関係など、ジェンダーに関わりなく選択する自由を獲得することができる。

②個人を尊重する平等な社会を実現できる。

③ヘテロセクシズムの偏見から自由になれる。

④ジェンダーを超えて、個人としての人間的な共同体を作り上げることができる。

モーガンが主張するジェンダー・カテゴリーの廃棄は、次章でヒューストンがいうようなジェンダーの無視ではない。モーガンは社会の操作的カテゴリーとしてのジェンダーを痕跡も残さず排除することを要請する。なぜならジェンダーは公的領域で権利・義務・権力・特権・責務そして役割についての格差の存在を支えているからである。またジェンダーが規範的な意味をもつ社会カテゴリーであるがゆえに、私的な領域でも排除されるべきだという (p. 48)。<sup>12)</sup>

モーガンにとって、「ジェンダー・フリー」は性差・性役割・性別によって構築される関係性など、すべてのジェンダーからの解放を意味する。そしてそれを実現するためには、ジェンダー・カテゴリーの使用を停止しなければならないというのである。

だがジェンダー・カテゴリーをなくせば、差別が解消され平等と自由が増大するというのは、あまりにも単純な議論であるように思われる。ジェンダー・カテゴリーは確かに、男女二分法を生み出し、差異化、分断、差別につながっていく契機をもった変数である。だが身分や階層・階級という言葉をなくせば、そこにある差別や格差が消滅するかといえば、かならずしもそうではない。彼女の主張は「寝た子を起こすな」的な議論になってしまう危険があるのではないだろうか。

### 3) ジェンダー・センシティブの提唱

第4章を担当したヒューストンは、フェミニストの立場から、すなわちセクシズムに対抗する立場から、「ジェンダー・フリー」に反対する論陣を張る。<sup>13)</sup>

ヒューストンは、まず3つの「ジェンダー・フリー」概念を提示する。1つは、男女差が現

れるあらゆる項目や活動を学校から排除するという「ジェンダー・フリー」である。性差を顕在化させる項目や活動は、いやでも男女が異なる性であることを明示的にしてしまう。したがってそれらを排除することによって、常時男女が同じ人間であるという状態に置こうとするのである。しかしヒューストンはこの考え方を退ける。後の議論から明らかなように、彼女は男女の差異について敏感(センシティブ)でなければならないという立場を採っている。差異が生じるような項目や活動を学校から消し去るというのではなく、そうした差異の現象や原因を探求すべきだと考えているからである。

もう1つは、ジェンダーを無視するという意味での「ジェンダー・フリー」である。これは、男女を区別せず等しく取り扱うこと、その結果として男女別の入学基準や性別の特別プログラムなどを作らないことを指す。先のモーガンのジェンダー・カテゴリー・フリー概念との違いは、カテゴリーという変数ではなく、現象としての性差を無視するという態度を「ジェンダー・フリー」と呼んでいるところにある。ヒューストンはこのジェンダー・フリー概念も退ける。なぜなら彼女は男女の差異に注目することを重要視するからである。

第3の概念は、ジェンダー・バイアス・フリーである。ヒューストン自身はこの第3の立場を採るが、公教育でジェンダー・バイアスを払拭することに関してはすでに合意が形成されているので、「公教育はジェンダー・バイアス・フリーでなければならないか？」は問うべき課題ではない、という。(pp. 50-51)

公教育はジェンダー・フリーであるべきか、というこの興味深い問いは、公教育はジェンダー・バイアス・フリーでなければならないか、という問いではない。公教育はジェンダー・バイアス・フリーでなければならないか、という問いは、少なくとも理論上はすべての立場の人々がすでに賛成しているので、これが論争点

ではない。問題は、ジェンダー・バイアスからの自由をどのように達成するのが一番よい方法であるか、である。私たちは、ジェンダーを無視するという方法を採用すべきなのか、それともジェンダーの差異を払拭すべきなのか、それともジェンダーをより詳細に注目すべきなのか？

ヒューストンが学校のジェンダー・バイアスとして、男子が主導権を握り、男子の行動様式が高く価値づけられることを例に挙げる。ボールゲームでは女子がボールに触る機会が制限され、教室での発言は男子によってさえぎられ、つまらない個人的なコメントであるかのように取り扱われることがジェンダー・バイアスにあたるというのだ。これを是正するにはどうすればよいのか？

彼女はジェンダーを無視するジェンダー・フリーの方法では、バイアスを除去できないと考える。なぜなら、第一にジェンダーの無視は、ジェンダー・バイアスの無自覚をもたらすからである。男女に平等に接しているつもり教師たちの実際の行動が、男子に偏っていることに教師自身全く気づいていない。教師は、ジェンダーを無視するのではなく、生徒たちの間の、そして自らのジェンダー・バイアスに気づくべきなのだ、という。(p. 54)

男女の生徒に平等に接して欲しいと支持された後行なった授業で、教師たちがクラスの半数にも満たない男子生徒に時間の3分の2を費やしていること、男子が正しい答えを言った時に褒め、女子がお行儀良くしているときに褒めていること、男子の成績が悪いときに叱り、女子の自己主張が強い時に叱っていること、男子の成績はその能力で説明し、女子の成績は、問題の難しさや運不運によって説明していること、を示す客観的な観察記録を見て、教師たちはショックを受けるのである。

第二の理由は、教師がジェンダーを無視しても生徒は無視しないからである。(p. 54)

教師はジェンダーを無視しようとするかもしれない、しかし、どのような相互作用がなされるべきか、誰が教育領域での発言権をもっているかについて、生徒たちが無視していないことが問題なのである。ジェンダーを公式の基準として排除することはできる。しかしそれは非公式の要素として機能し続けるのである。

では、もう一つの方法、ジェンダーの差異を顕在化させない「ジェンダー・フリー」はどうか？ 女子の体力や能力に合わせたプログラムを実施することによって男女差を排除しても、女子のために男子本来の基準を引き下げたと解釈されて、女子に対する低い評価は残ってしまう。男子を基準モデルとし、女子をそれに近づけることを格差の解消と考えることは、セクシズムの解消にならない。たとえば教室での発言の男女差を解消しようとするれば、それは男子の話し方のパターンを女子に強制することになりかねない、とヒューストンは危惧する。(p. 56)

教室で自信に満ちた話し方をするように女子を訓練することは、女子が成功したいのであれば「男性的」な話し方を身につけないといけないという、ダブルバインドに女子を追い込むだけである。すでに述べたように、男子や男性にとって力強いと評価される話し方は、それを女子や女性が用いた場合、拒否的あるいは敵対的とみなされるのである。さらに言えば、女性の通常の話し方は、他者の参加を促すような話し方であり、考えを協同的に発展させるような話し方であって、対立的な話し方ではないのである。もし私たちが、ジェンダーの差異を排除しようとするなら、差異についての私たちの評価には、それ自体バイアスがかかっていることに常に留意しなければならない。

このような考察の結果、ヒューストンは次のような結論に達する：「ジェンダー・フリー」の方法では、学校の中のセクシズムを見つけ出して排除することができないばかりでなく、男子のようになれば、女子を励ます結果を生んでしまう。

とはいえ、「ジェンダー・フリー」の方法を全面否定するわけではない。ジェンダーを無視すること、あるいはジェンダーの差異を縮小しようとすることは時には有効だからだ。

しかしジェンダーを目の色の違い程度のものとして取り扱おうとすることには、ヒューストンは批判的だ。なぜならジェンダーは単なる個体差を示す特徴でなく、権力構造と密接に結びついているからだ。ジェンダーは男女間の利害関係や権力関係と結びついて、社会関係を構築するのに利用される要素である。したがってジェンダーという要素を教育の中から除去しようとする「ジェンダー・フリー」には問題がある。なぜならその方法は、ジェンダーの差異があるのかないのか、そしてその差異をどのように評価するのか、という2つの重要な問題を考察に値しないものとして排除してしまう危険があるからだ。そしてジェンダーの権力構造に目をつぶってしまう恐れがあるからである。

私たちのすべきことは、ジェンダーの差異がどのように価値づけられているかについて、詳しく正しい情報をもつことである。「私たちはもっとジェンダーに注目すべきであって、無視すべきではない。私たちはジェンダーの差異についてさらに探求すべきであって、ジェンダーを排除しようとするべきではない。」と、ヒューストンは言う。ジェンダーは常に変化し生成を繰り返すものであって、それを無視することは、この変化を把握し理解することを放棄することになる、と。(p. 60)

ジェンダーは常に変化する関係性の集合体であり、社会関係の中で他の構造化要因 (structuring processes) の生成によって常に影響されている

ので、ジェンダー・フリー戦略は単純すぎるように思われる。この戦略では、ジェンダーが無視できるものであり、関係がないものという誤解を生む。ジェンダー関係は無視できるかもしれないが、それには問題をより解決困難なものにしてしまう危険がある。ジェンダー関係が変化しうるものであるにもかかわらず、それを排除できると考えることは目標を見失うことになる。ジェンダー・バイアスを除去するためには、ジェンダーに目をつぶるより、ジェンダーの多様性に注目するべきである。

このようにして、「ジェンダー・フリー」戦略の問題点を指摘したヒューストンは、「ジェンダー関係をつぶさに観察することを推奨し、そして平等化が必要なときには直接的に介入することを求める」<sup>14)</sup> ジェンダー・センシティブな戦略を提唱する。「ジェンダー・フリー」戦略とジェンダー・センシティブ戦略の違いは次のようである。(pp. 60-61)

ジェンダー・センシティブ戦略とジェンダー・フリー戦略の差異は、ジェンダー・センシティブ戦略が、さまざまな機会、さまざまな状況で、ジェンダー・バイアスを除去するために、時には対立する政策を採用する必要があるかもしれないという認識に立っていることである。ジェンダー・センシティブの視点は、特定の慣習についての私たちのすべての疑問に答えることのできるような詳細な教育計画書ではない。そうではなくて、生徒や教師がセクシストな文化を理解し、対抗することができるような方法を求めることを常に意識させるものである。それは状況的な戦略である。バイアスを除去するために差別のパタンに見合った活動を選ぶという戦略である。これが特に留意すべき特徴である。この視点のよいところは、常に現れる新しいタイプの予期しなかったジェンダー・バイアスにも対応できることである。

ジェンダー・センシティブな視点の優れた点は、自己訂正作用を持つ方法を生み出すことができることである。というのはジェンダーがセックス間の関係性であり、私たちの生活を常に組織、再組織している過程であると認識できているからである。圧力を加え、反応を生み出し、変化をもたらすというジェンダーシステムのダイナミックな性質に気づいているからである。特定の状況で必要とされるジェンダーについて常に警戒し、計画を立て続けているのは、考察した3つの方法のなかで、このジェンダー・センシティブな視点だけである。この視点を採用することによって、私たちは自分たちの間違いに気づき、不要になった政策や実践を変更し、新しい状況に合った新しい政策を導入することができる。この意味でジェンダー・センシティブな視点は、セックスの平等という掴み所のない理念を実現するための自己訂正可能な方法なのだ。

このようにヒューストンは、「ジェンダー・フリー」の方法ではなく、ジェンダー・センシティブな方法を推奨する。だがジェンダー・センシティブ戦略にも問題がある。というのは、セクシストもある意味でジェンダーに敏感であるのだから、単にジェンダーに敏感なだけでは、セクシズムの解消にはならない。たとえば教師がジェンダー・ステレオタイプな人間であれば、生徒にみられる行動様式や態度を、「やはり女の子は泣き虫だ」とか「男の子は乱暴なものだ」というように、自らのステレオタイプなジェンダー観を強化再生産する方向で観察結果を解釈するかもしれない。ジェンダー・センシティブであれ、というヒューストンの要請は、教師がセクシストでない場合はセクシズムの解消に有効であるが、教師がセクシストであれば逆効果を生んでしまう可能性がある。ジェンダーを理由にした抑圧と搾取からの解放、選択の自由の確保、そして平等で公正な関係の構築が目標になってはじめて、ジェンダー・セン

シティブはセクシズムを解消する方法として機能するのである。

次に、以上3つの論文から明らかになった問題点を整理してみたい。

#### 4 ジェンダー・フリー概念とセクシズム

##### 1) 「ジェンダー・フリー」の多様性

これまでみてきたように、彼女たちのジェンダー・フリーについての考え方は一様ではない。アイムはセクシスト的性役割観からの自由をジェンダー・フリーと呼んでいる。モーガンはセクシスト的であるか否かを問わず、あらゆるジェンダーからの解放を目指しており、その意味では字義通りのジェンダー・フリーを提唱している。また方法としてはジェンダー・カテゴリー・フリーを主張する。ヒューストンはジェンダーの差異を問題にし、差異が顕在化するプログラムの排除やジェンダーの無視を、さらにはジェンダー・バイアス・フリーをジェンダー・フリーと呼んでいる。その上論文タイトルのジェンダー・フリーダムは、論文の内容から見て「セクシズムによって重層的に構築されたジェンダー構造」からの解放を指していると思われる。

アイムが標的にしたのは単なる役割ではなく、「伝統的」性役割観であり、ヒューストンは「セクシズムによって価値づけられた」性差を問題にしているが、社会の構成要素としてのジェンダーからの解放を唱えているわけではない。つまり彼女たちが問題にしているジェンダーは、セクシズムに支配されたカギ括弧つきの、しかもジェンダー構造の特定の位相のジェンダーである。それに対してモーガンはジェンダーというカテゴリーや考え方それ自体を消失させようと言う。このようにジェンダーおよびジェンダー・フリーは、3つの論文の中でさまざまに解釈されている。

だが共通性もある。それはセクシズムの重層性やそれを貫徹する男性優位・男性中心主義

が、彼女たちにとってあまりにも自明の認識になっていることである。そのために、セクシズムによって定義づけられ構築された「ジェンダー」と、社会的変数としてのジェンダーの区分けが不十分になりがちであった。

アイムやヒューストンが「ジェンダー・フリー」という言葉を使用する時、それがジェンダーのどの位相（カテゴリー、性差、性役割、性関係などなど）の、どのようなカギ括弧つき（「固定的・ステレオタイプな」、「伝統的で規範化された」、「男性優位の差別的な」などなど）のジェンダー概念であるかを、明確にした上で議論すべきではなかったか。そして「ジェンダー・フリー」に「セクシズムによって重層的に構築されたジェンダー構造」からの解放を意味させる時には、「セクシスト的ジェンダー構造・フリー」と表現する必要があったのではないだろうか？

## 2) セクシズムの2つの問題点

彼女たちの議論からセクシズムがもつ2つの問題点を指摘することができる。1つはセクシズムが固定的・規範的な性別特性や性役割を「伝統の維持」を理由として個人に強要することである。その結果、個人の機会や選択の幅が縮小され、選択の自由が制限される。女性にはその制限が大きい、男性も例外ではない。

もう1つの問題点は、セクシズムが性別特性や性役割を優劣・上下の関係に位置づけ、それによって男性の優位や、男性による女性の支配を正当化することである。

したがってジェンダーを考えると、機会の制限を問題にするのか、それとも男性への従属や劣位の関係性を問題にするのかを自覚する必要があるのではないか。なぜなら前者は男性との共闘が可能であるが、後者には男女の利害対立が内包されているからだ。そのためどちらの問題の解消を目指すかによって、採りうる戦略も変わってくるだろう。

## 3) ジェンダー・バイアスの多義性

ヒューストンは限定的とはいえ、ジェンダー・バイアス・フリーも「ジェンダー・フリー」に含めている。そしてバイアスをセクシズムや性差別の発露とみなし、バイアスの除去を目的にする。しかしバイアスが何かの基準からの偏差であると考えたら、その基準を正しいと考えるか否かで、バイアスであるかないかの判定が下されることになる。たとえば、ステレオタイプな性役割を正しい基準と考える「伝統主義者」たちにとっては、それをバイアスのかかった性役割観とはみなさないだろう。彼らにとってはむしろ、女性が「男性職」に就くことがバイアスになるに違いない。

セクシズムを、多様性と選択の自由を認めないものとして批判することはできる。またセクシズムが男女関係の優劣・上下を正当化しているとして、平等の視点から退けることもできる。しかし個人のジェンダー意識そのものについては微妙な問題を孕んでいると言わざるを得ない。

アイムが描き出したように、これまでセクシストたちが、男性に従属し男性に奉仕する女性を「女らしい」として規範化・称揚し、それと異なる生き方をする女性を非難・排斥してきたという歴史があることは事実である。しかしフェミニストが選択の自由、価値の多様性を推進しようとするなら、ある個人が伝統的ジェンダー意識をもつからといってそれを批判することはできない。とりわけ公教育の場では、多様性を認め、選択の幅を広げ、男女の関係を平等なものにするという目標を立てることはできても、個人のジェンダー意識の変更を目標として掲げることはできないのではないだろうか？

## 5 ジェンダー・フリーの行方

セクシズムが浸透した学校での教育は、教材や教師自身のジェンダー・バイアスに自覚的であらねばならないし、ステレオタイプな性別特

性や性役割観を注釈なく提示してはならないだろう。その意味で教師は常に自分のジェンダー・バイアスからフリーでなければならない。学校から性差別をなくすには、時に生徒のジェンダーを無視し、忘れる必要があるかもしれない。ジェンダー・カテゴリーを廃棄し、性差を無視すれば、生徒を女子・男子としてではなく単なる「生徒」＝無性の存在として平等に処遇できるかもしれない。

だがさらに進んで、生徒に対して「無性の存在」あるいは「両性具有」であれと望むことはできるのだろうか？ そのように教育していいのだろうか？ この問題を考察しようとしたのが、第5章と第6章の論文である。<sup>15)</sup>

### 1) 両性具有の人間像

モーガンは第5章「両性具有の教室：解放かそれとも圧政か？」<sup>16)</sup>で、学校で理想的人間像を押しつけることの危険を説く。

この論文でモーガンは、性役割を両極化し、ステレオタイプ化し、それへの同化・適応を規範として押しつけることをセクシズムと呼ぶ。それは個人の自律や自己決定を損なうものであるので、教育でステレオタイプな行動様式や性役割を社会化することは許されない、私たちはセクシストの教育を学校から排除しなければならない、だがしかし、とモーガンは問いかける、だからと言って、性差のない両性具有の世界や人間像を、教育目標に掲げることは正しいのだろうか？ と。

彼女によれば両性具有の推奨者は、両性具有を目標にすることによって子どもが生物的性によって異なる期待をもたれることなく、いわゆる男性性と女性性の両方を備えたより完全に人間的な存在になれる、と主張するという。性別二分法は個人を心理的に分裂させ、アイデンティティを歪曲させる、と見る人々にとって、両性具有という考え方は完全と統合を約束してくれる新概念である。だが両性具有を教育の中に位置づけることはできないだろうと、モーガン

は3つの困難を挙げる。(pp. 69-72)

第一に、女(男)らしさの概念は、社会・文化的な多様性をもつものであるから、女(男)らしさの統合である両性具有も、特定の社会や時代を反映したものにならざるを得ない。したがって両性具有は教育目標としての普遍的な理念となることはできない。

第二に、理想的人間像として両性具有が設定されれば、両性具有的でない生徒は低く評価されることになる。これは人間の多様性を認めて固定的な性役割や女(男)らしさから脱却するという反セクシズムの議論と矛盾する。

第三に、同様に両性具有を理想的人間として掲げることは、それを押しつける危険性を孕む。

モーガンがこのように両性具有の人間像について議論するのは、ジェンダー・カテゴリーの廃棄や性差の無視、あるいは性別特性からの解放を目指すことの、一つの帰結が両性具有だからである。カテゴリーにしろ、性差をみる視点にしろ、ジェンダーを学校から消失させてしまおうという議論の果てにあるのは、両性具有の人間像でもありうることを示そうとしているといつてよい。

生徒を男女の区別なく平等に扱うことや、時にはジェンダーを無視することと、男女の区別のつかない生徒(人間)を育てることとは、根本的に異なる。しかし、生徒がジェンダーから解放されることを教育目標に掲げた場合には、そのジェンダーが特定のもの、たとえば伝統的性役割であることを明示しておかないかぎり、両性具有を理想的人間像として掲げることにながってしまう。

私たちが「ジェンダー・フリー」と言うとき、両性具有の人間像を理想とするのか否か、また生徒にそれを「理想的人間像」として示そうとするのか否か？ さらにはそもそも「理想的人間像」を学校で提示することができるのか否か？

こうした問題が「ジェンダー・フリー」の概

念に含まれていることを、モーガンのこの論文は示している。

## 2) 生徒のジェンダー・アイデンティティ

第6章「ジェンダーの理論化：私たちはどの程度ジェンダーを必要としているか？」<sup>17</sup>でヒューストンは、「性の公正を実現するためには、私たちはジェンダーを捨てなければならないのか？」という問題を提起する。男女二元論を超えた生活とはどのようなものか？ジェンダー・アイデンティティを持たないということはどういう意味になるのだろうか？と。

セクシズムの根底にジェンダー二元論があることは確かなのだが、セクシズムを克服するには二元論を、さらに言えばジェンダー・カテゴリーを、廃棄しなければならないのだろうか？ヒューストンは、ジェンダー・カテゴリーの廃棄が生徒のジェンダー・アイデンティティの廃棄につながる危険を指摘する。(p. 81)

子どもを、自分が男か女か（あるいはどちらでもないことを）知らずにいるようにしておくことを、私たちは本当に望んでいるのだろうか？彼らが自分のジェンダーがどちらであるかについての疑問を持たせてよいのだろうか、あるいは疑問を持たせたいのだろうか？しかしこのような努力は心理的統合を危険にさらす不当なものと言えはしないか？

女子が自分たちを、可愛いばかりでなく知的で有能だと考えるなら、そして男子が自分たちを、大きくて強いばかりでなく慈愛にみち魅力的だと考えるならば、それはよりよいことである。しかし、自分がどの性に属しているか（あるいはどちらにも属していないか）についての感覚がジェンダー・アイデンティティだとするならば、ジェンダー・カテゴリーの廃棄によってもたらされる変革が可能であり望ましいものであるか否かについては疑問がある、とヒューストンは言う。

なぜならジェンダー化された自己についての感覚は、「中核的ジェンダー・アイデンティティ」と呼ばれることがあるからだ。仮にある論者がいうように「中核的ジェンダー・アイデンティティ」が誕生後数年で獲得され、いったん確立すると、その後変化することがないならば、ジェンダー・アイデンティティを再決定すること、つまり女子だと思っている人にあなたは男子だよということが非常に困難であることは疑いないだろう、と彼女は言う。(p. 81)

あるジェンダー理論によると、中核的ジェンダー・アイデンティティは、それがいったん確立されると、永久に固定化され、それを変化させようとするいかなる試みも、その時点を過ぎると、無効であり、主体に悲惨な結果をもたらすものとして道徳的に許されないという。

ジェンダー・カテゴリーを学校から廃棄することが、男女どちらでもない存在すなわち無性の存在として生徒を処遇するばかりでなく、無性の存在であることを要求することになるなら、ヒューストンがここで案じているように、生徒のジェンダー・アイデンティティに大きく干渉することになる。

目的が男女間の支配・服従関係の解消であるなら、女（男）らしさの意味を変えることができればよいのであって、ジェンダー・カテゴリーを廃棄する必要はない。また社会に浸透するジェンダーによって、いったんジェンダー化された主体が、反省的にジェンダー・アイデンティティを変えることができればよいのである、とヒューストンは考えている。

ヒューストンがジェンダー・カテゴリーの廃棄を批判する理由がもう一つある。それはジェンダー・カテゴリーを廃棄しようとする人々が、女性性の価値を再評価するギリガンの立場を批判しているからである。

たしかにギリガンの論文には、①すべての女性がギリガンの言う倫理性をもつわけでない、

②既存の性別分業を固定化し、女性への抑圧を維持させる危険がある、③女性が女性性とされるものを相対化する視点を考慮していない、の3つの問題点がある。しかし、ジェンダーを二分しそれぞれに別個の特性や役割を付与する性別二分法を脱構築することと、ジェンダー・カテゴリーを廃棄することは別である、とヒューストンは言う。(p. 79)

ジェンダー・カテゴリーは、かならずしも本質主義的自然を前提にしているわけではない。たしかにジェンダー・カテゴリー自体も社会的構築物であるから、それを廃棄することは可能である。と同時にジェンダー・カテゴリーを変えることもできるし、社会的に有用な形で使用することもできる。二元論を超克するためにはジェンダー・カテゴリーの廃棄が必要不可欠であるとはいえない。それどころか、ジェンダー・カテゴリーを廃棄して、男性も女性も存在しないことになれば、「女性」という社会的位置づけのゆえに生じた経験をもとに、中絶の禁止や同一価値同一労働を要求する基盤を喪失することになって、女性のニーズや関心についての問題を提起することができなくなる、とヒューストンはリンダ・アルコフ<sup>18)</sup>を引用して反論する。(p. 80)

もし「女性」が存在しないとしたら、そして「女性」の名の下に何かを要求することが神話を強化するだけだとしたら、私たちは「女性」として何を要求することができるのか？ カテゴリーがフィクションだとしたら女性の利益に反するものとしてのセクシズムにどう対抗すればよいのか？ 「女性」という概念を持たずに、私たちは、中絶の合法化、適切な保育、同一価値による同一賃金を要求することができるのか？ つまりジェンダーの廃棄への提唱は、フェミニストの政治の根拠を切り崩すものである。名目論それ自体がフェミニズムを消滅させてしまう。私たちは、「女性」フィクションへの対応と再構成のための、消極的闘いの場に置

かれることになってしまう。

第4章の論文にも見られたが、ヒューストンは女性の行動や役割を男性のそれより低く位置づける評価のあり方を問題にしている。その前提には男女で特有の行動様式や価値志向があるという認識がある。彼女のこの立場は、基本的に性差をないもの、あるいは無視すべきものと考え、ジェンダー・カテゴリー・フリーの立場とは相容れないのだ。

こうしてヒューストンは、私たちにとってジェンダー（・カテゴリー）が不必要なものではなく、差別を解消し平等を実現するためには必要なものであると主張する。

### 3) 教師の「ジェンダー・フリー」と生徒の「ジェンダー・フリー」

上記2つの論文は、生徒がどちらのジェンダーに属するかを、あるいはそのジェンダーをどのように生きるかを、教育することはできるのだろうか？ してよいのだろうか？ という問題を提起している。サブパート1「公教育はジェンダー・フリーであるべきか？」の3つの論文では、学校もしくは教師の「ジェンダー・フリー」が論じられていたが、ここでは、生徒の性差を取り上げて、生徒に無性の存在であることを期待することができるか、また道徳的に許されるか否か、が問われている。

問題は、生徒をジェンダー・カテゴリーから自由な存在に、両性具有の存在にしようとするだけではない。学校で教師が「理想的人間像」を提示できるかどうかも問題なのだ。どのような存在のあり方にしろ、一定の人間像を理想として生徒に提示することができるのだろうか？ してよいのだろうか？ 「女性（男性）は＜女性（男性）らしく＞あれ」と教えようとすることも、「＜女性（男性）らしく＞なく生きよう」と呼びかけることも、ともに問題だろう。モーガンはそこに「圧政」の危険を見出したのだ。

私たちはセクシズムが学校の中に自明のものとして、あるいは潜在的カリキュラムとして埋め込まれていることを指摘し、明らかにすることはできる。だが、セクシズムが提唱する人間像を否定することには慎重であらねばならない。ステレオタイプな性別特性を「らしさ」のもとに押しつけられ、伝統的性役割をいやおうなく選ばされてきたことに気づくことと、その「気づき」の上に立って各人が人生の選択を行なうこととの違いを、常に意識していなくてはならない。学校や教師は「気づき」の場を提供することはできるが、特定の間人像を理想として生徒に強要することはできない。

セクシズムと闘ってそれを解消しようとするには、セクシズムの問題点を理解し、それに捉われない人間を増やす必要がある。アインの論文に見られたように、セクシストたちは教育によってセクシズムの再生産を図ろうとする論陣を展開してきた。しかし、生き方や価値の多様性を求めてセクシズムに闘いを挑むなら、特定の生き方を規範化して強要するというセクシストの轍を踏むことはできない。

私たちは「ジェンダー・フリー」という言葉を用いるとき、それがどの位相の、どのような「ジェンダー」からの解放なのかを明らかにすると同時に、それが誰の「ジェンダー・フリー」を意味しているのかも、常に考慮していなければならないのではないだろうか？

## 6 おわりに

ジェンダーは階層、年齢、人種・民族などと同じ社会的変数である。それは限りなく連続体に近い変数であるが、カテゴリー化されて、私たちの関係性や地位・権力の配分の基準として利用され、社会的構成物である重層構造を形作る。またこれらの変数は、私たちのアイデンティティ形成に深く関わっている。ジェンダー・アイデンティティは、社会のジェンダー観に影響されて変化しつつも、個人の中核をなすアイ

デンティティのひとつである。したがって「～がない」という意味で「フリー」を使うなら、ジェンダーのない社会は、階級のない社会と同様、ユートピアである。少なくとも現時点ならびに近い将来まで、私たちはいやおうなくジェンダーのある社会を生きざるを得ない。

またジェンダーは社会的構成物であるがゆえに、時代によって、また社会や集団によって、その構造の様相が異なる。たとえばカテゴリーとしてのジェンダーの使われ方、性差の解釈、性役割の規範性、ジェンダーによる社会的地位の配分は、日本とスウェーデンやカナダでは異なる様相を示す。また日本でも、20年前と今日ではジェンダーの様相は大きく変化している。非婚や離婚の増加は結婚についての規範意識の減退を示している。遅々たるとはいえ、女性議員や女性管理職も増加しつつある。その一方で、女性の働かされ方や女性への暴力などに、セクシズムが温存され続けている。

ジェンダーのある社会でジェンダー・カテゴリーを廃棄すること、もしくはジェンダーを無視することは、時にセクシズムの解消に有効に作用することがある。しかしヒューストンが言うように、その方法はジェンダー構造が権力的に構築されていることに目をつぶる危険を孕んでいる。さらに本書で論じられたように、無性の人間を理想とするのか、あるいは生徒のジェンダー・アイデンティティの形成にどこまで踏み込むことができるのか、という問題を内包している。

私たちの課題がセクシズムの解消であるとするなら、ジェンダー関係や地位と権力の配分の平等化にどの方法がもっとも有効であるかが問われなければならない。ジェンダー・カテゴリーの廃棄や性差の無視という方法よりも、ジェンダー間のバイアスに注目してその是正を図る方がよいかもしれない。

ヒューストンと同様私自身もジェンダー・バイアス・フリーの立場を採るとしてきた。しかしジェンダー・バイアス・フリーにという言葉

の使用にも注意が必要であることが、本書の議論を紹介している過程で明らかになってきた。なぜならジェンダー・バイアスという概念に2つの意味があるからだ。

バイアスを思い込みとか固定観念と定義づけるなら、個人の選択の自由という観点からバイアスの解放を主張することは、比較的容易である。なぜなら選択の自由についての異論が少ないからである。しかしバイアスを、ある基準・理念からの偏差・偏見と解する場合は、何を基準・理念とするかは個人の価値観に関わることなので、それがバイアスなのか、またそのバイアスを解消すべきなのかを巡って、意見の対立が生じうる。

たとえば中学校の女性教員の構成比が30%である場合、それを適正な割合であると見る人もいれば、50%でないがゆえに偏っていると考える人もいる、この場合各々が、支持する構成比の妥当性を論証することが迫られる。もちろんその論証の中にも、選択の自由の要素が入らざるを得ないが。

したがってジェンダー・バイアス・フリーも、ヒューストンが言うほど合意形成が保障された概念ではない。ジェンダー・センシティブという概念と同じく、それ自体に反セクシズムが内包されているわけではないのだ。私たちがジェンダー・バイアス・フリーの立場を採る時には、解消すべきセクシズムを明確にし、バイアスの意味を具体化した上で、もしバイアスを偏差や偏見の意味で用いるならば、それが「偏っている」と判断する根拠を示す必要があるだろう。

セクシズムは、学校ばかりでなく私たちの生活のあらゆる場面に、時には私たち自身の心の中にまで浸透している。その上ジェンダーの様相は時代によって変貌し社会や集団によって多様であるので、セクシズムも常に生成し変化する。それゆえセクシズムの解消を目指す闘いは容易ではない。

セクシズムによって構築された不平等な関係

や差別的な権力・資源配分を解消するためには、これまで見てきたように、ジェンダー・カテゴリーを廃棄するほうがよいのか、使用するのがよいのか、性差を承認するのか、それとも最小化を図るのか、性役割を解消しようとするのか、あるいはその価値の平準化を目指すのか。「セクシズムによって構築されたジェンダー構造」を「男女平等主義によって構築されたジェンダー構造」に変えるために、各位相での闘い方について、私たちはさまざまな選択を迫られている。

明確なジェンダー概念を有効に用いることによって、私たちはセクシズムに絡めとられることなくセクシズムを分析・解体し、セクシズムと闘うためのもっとも適した戦略を考案することができるだろう。本書は、そのための多くの示唆を与えてくれる。

#### 注

- 1) Ann Diller, Barbara Houston, Kathryn Pauly Morgan, Maryann Ayim; *Gender Question in Education: Theory, Pedagogy and Politics*, Westview Press, 1996.
- 2) ここで「捉えにくさ」と訳した言葉の原語は「subtleties」である。この言葉こそ捉えにくく訳しにくい。分かりにくさ、微妙さ、ともいえるが、この論文の文脈では、セクシズムを相手にして闘うことの、一筋縄ではいかない複雑さと困難さを表現していると考えられるので、「捉えにくさ」と訳した。
- 3) Lynda Stone (ed.); *The Education Feminism Reader*, Routledge, 1994.
- 4) 哲学が専門でない私にとって難解な箇所もあった。十分に訳しきれていない面もあるだろうが、読者の寛容を請いたい。
- 5) 第II部、第III部の構成は以下のとおりである。

#### Part Two: Pedagogy

7. The Ethics of Care and Education: A New Paradigm, Its Critics and Its Educational Significance (Ann Diller)
8. Describing the Emperor's New Clothes:

- Three Myths of Educational (In-)Equity  
(Kathryn Pauly Morgan)
- Subpart Two: FEMINIST PEDAGOGY  
AND THE ETHICS OF CARE
9. The Perils and Paradoxes of the Bearded Mothers (Kathryn Pauly Morgan)
10. Is Rapprochement Possible Between Educational Criticism and Nurturance? (Ann Diller)
11. Role Models: Help or Hindrance in the Pursuit of Autonomy? (Barbara Houston)
- Part Three: Politics
12. An Ethics of Care Takes On Pluralism (Ann Diller)
13. The Moral Politics of Sec Education (Kathryn Pauly Morgan)
14. Women's Physical Education: A Gender-Sensitive Perspective (Ann Diller and Barbara Houston)
15. Political Correctness: The Debate Continues (Maryann Ayim)
- 6) Maryann Ayim & Barbara Houston: A Conceptual Analysis of Sexism and Sexist Education.
- 7) これら 3 つの論文は、ジェンダー・フリーをめぐる考え方を 3 つの角度から提示するために意図的に構成されている。特に第 2, 3 章の論者に課せられたのは、特定の立論を明確にするという役割である。デイラーも序章で、第 2, 3, 4 章について次のように書いている。(p. 2)
- セクシズムがさまざまな形で浸透し、私たちの教育体験に結びついていることが分かったので、これにいかに対処すべきかという問題から始めることにした。サブパート 1 では 3 つの相互に関連した章を立てて、公教育でジェンダーがどのように取り扱われるべきかについて、複数のオルタナティブを提示することにした。
- 8) Maryann Ayim; Genderized Education: Tradition Reconsidered.
- 9) S. Goldberg; The inevitability of patriarchy, in M. Levin. *Sex equality*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, 1977.
- 10) Moral Majority や National Pro-Family Coalition などの右翼グループによって提出された議案であるという。(p. 34)
- 11) Kathryn Pauly Morgan; Freeing the Children: The Abolition of Gender.
- 12) モーガンは文末の注でわざわざ、ジェンダーの無視との違いをこのように書いている。
- 13) ヒューストンが『教育フェミニズム読本』に掲載した論文のタイトルを、原題から変更して「公教育はジェンダー・フリーであるべきか?」としたのは、彼女のこの論文が、本書の著者たちの意見を代弁したものであるからではないだろうか。
- 14) Jane Martin の教育哲学会での会長挨拶 (1981) から引用している。
- 15) この 2 つの章は、それぞれ特定の論者の議論に対する反論として議論を展開しているが、本稿ではその詳しい紹介は省き、ジェンダー・フリーという概念のもつ意味を検討するという観点から、簡略にまとめてみた。
- 16) Kathryn Pauly Morgan; The Androgynous Classroom: Liberation or Tyranny?
- 17) Barbara Houston; Theorizing Gender: How Much of It Do We Need?
- 18) Linda Alcoff; Cultural feminism versus post-structuralism: The identity crisis in feminist theory. in E. Minnich, J. Barr and R. Rosenfeld (eds.), *Reconstructing the Academy*, Chicago: University Chicago Press, 1988 (p. 272).